

季刊

四

季

第九号



四季社

一九八六年一月一日発行

季刊 四季

第九号

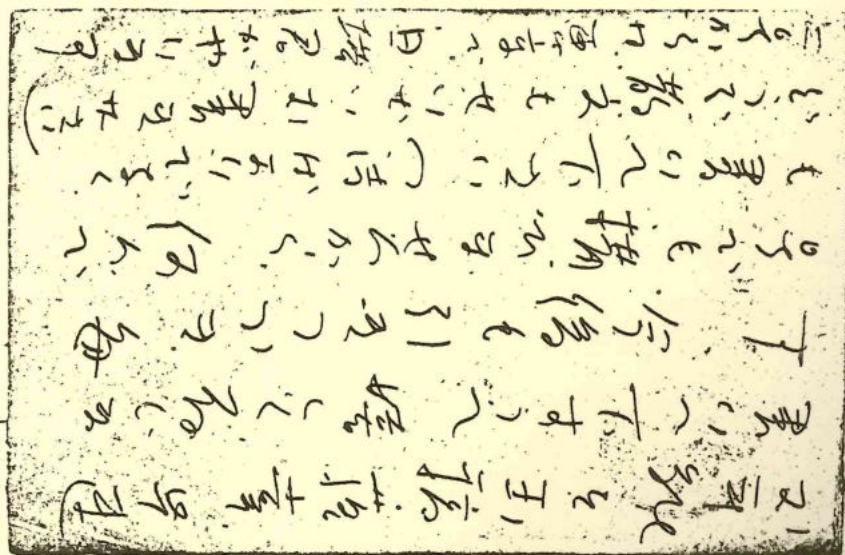
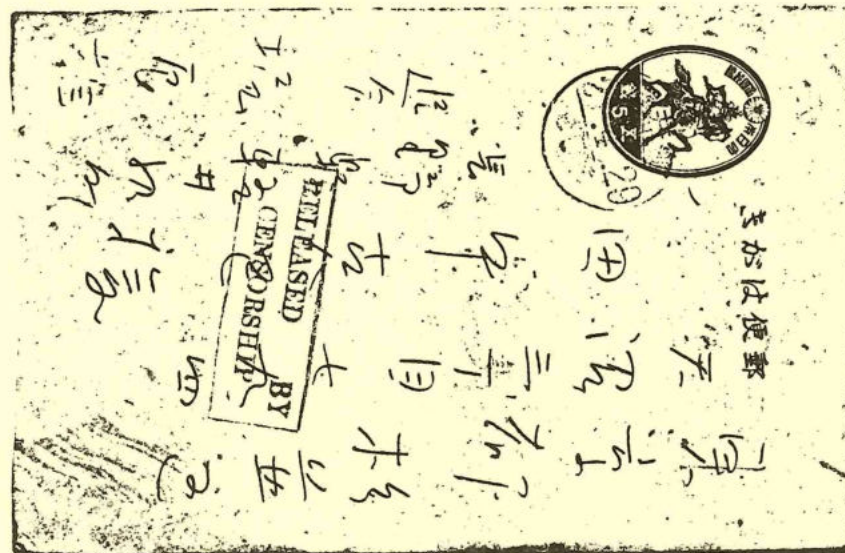
定価 三〇〇円

四季社

目次

季刊四季・第九号

ダヴィンチ「女の頭部」復写	表紙
はがき	堀 辰雄 表紙裏
雑煮餅	植村 清二 2
所得人・室生犀星	高田 瑞穂 4
映画『モーツァルト』から	山住 正己 8
南樓望（盧僕）	松枝茂夫訳 10
粉雪のふる日	浅野 晃 12
初山踏み	牛尾三千夫 14
ファンタジー	小高根太郎 16
善と悪	石山 直一 18
わたしの星	田中 克己 21
死を思う	坂口 允男 24
旅愁	大野沢緑郎 26
望遠鏡を	たかはし しげおみ 28
ブリタニカ	福地 邦樹 30
遠くの火	花井タヅ子 32
同人略歴	高田 瑞穂 34
同人規定・会員規定	35
四季関係出版書目	36



雑煮餅

植村清二

小春日和の午後、ブラジルとモカのブレンドを熱く淹れる。お茶受けならぬ珈琲受けはビスケットである。ビスケットはマリーである。以前はイギリスのジェイコブ製を愛用して、いつぞや下疋屋の賣店に並んでいたのを、大箱そっくり買い取って、店員を驚かしたことがある。

その後会社の合併が何かあったために、ハントリー・パーマーに代えたが、それも近頃は見当らなくなった。フィンランドのカンコランなどで間に合せているのは、まことにわびしい。

ビスケットとは、元来ラテン語で「二度焼き」という意味だという。もともと軍隊の携帯行糧から起ったのであろう。いまはクッキーなどが沢山出来て、小麦粉はもとより、牛乳・バターなどにも吟味が行き届いているが、やはりほんのりした焼きの香ばしさが身上である。その香ばしさが薄くては、ビスケットを口にする氣がしない。

餅も子供の頃から、僕の好物である。牡丹餅、阿倍川餅、大福餅、どれもみな賞味するが、最も好きなのは、切餅を素焼きにして、焦目を作って、それを醬油に涵して、もう一度網に掛けた、つけ焼きつまり二度焼きである。

むかしは火鉢に網を掛けて餅を焼いたから、炭火を調節して、焼加減を見るのが楽しみであった。焼き上ったのから食べて行くから、十個以上も平氣であった。いまは三個くらいに控えているが、これも心さびしい。

雑煮餅も好きである。父も母も大和生れなので、子供の頃は、雑煮はずっと関西風の白味噌仕立てであった。それが上京して学生生活の間に、清汁雑煮の味に慣れて、その後数十年鄙めぐりをしたが、雑煮の清汁

仕立は、今に変わらない。

雑煮の具は多くない。鶏肉に祝儀用の背中の紅い蒲鉾、錦絲玉子、それに青味の三葉芹くらいである。餅は切餅で二片、焦目がついて、皮から中身のはみ出しているのが好きである。むかしはこれを三碗も四碗も更えた。今は年のせいだ、これも二碗どまりである。

若い頃冬休みに、妻と一緒に九州を旅したことがある。大晦日に長崎に着いて、そこから雲仙に登って、九州ホテルに投宿した。木造の粗末な建物であったが、香港、上海あたりから来て越年する外人なども多かったために、ホテルは立て込んでいた。最初に通された部屋が、見すばらしかったので、フロントに交渉すると、こんどはNo.1の部屋に替えてくれた。部屋に入って氣がつくと、欄間には秩父宮兩殿下の撮影が懸っている。さては御使用になった部屋かと、少なからず恐縮した。

明ければ元日である。朝食の知らせがあったので、食堂に入ると、案内された席は、メインテーブルの正面である。貧乏教師の僕は、大いに辟易したが、お嬢様育ちのせいだ、妻が法めも臆もしないのは、まことに心強かった。席に着くと、ボーイが

「御雑煮をお持ちしましょうか」と聞く。

新春早々トーストにハムエッグスも氣が利かない。縁起を祝って雑煮を命ずると、早速持つて来た。

一目見て驚いた。馬場三郎兵衛の盃そのままの大きい碗の底に、丸餅の煮たのを、狸の何やら見たいに敷き延べて、その上に輪切りの大根・蕪・芋・人参の類が、火の国の畠の幸はこれを見よとばかりに、堆く載せてある。見ただけでげんなりとして、食欲を喪失した。それでも無理に一箸二箸つけては見たが、匆々にナプキンで口を拭いた。妻は一口も食べなかつたらしい。

その午後、僕は馬に乗って、普賢嶽に登った。頂上の霧氷は美事であったが、空が曇っていたために、三隅の港は見えなかった。

所得人・室生犀星

高田瑞穂

萩原朔太郎が、「所得人・室生犀星」という一文を『文芸』に掲げたのは、昭和十一年六月のことであった。「世には二種属の人間がある。一方の種属の者は、いつもムダな死金を使ひ、時間を空費し、無益に精力を消耗して、人生を虚妄の悔恨に終つてしまふ。彼等は『人生の浪費者』である。反対に他の者は、物質上にも精神上にも、巧みにその最高の能率を利用して、人生を最も有意義に處生する。彼等は『人生の所得者』である。ところでこの前者の範疇は僕であり、後者の典型は室生犀星である。(略)物質上でも、時間上でも、室生ほど人生をよく利用し、一分のムダもなく生活してゐる人間はない。この意味で、彼の人生は全くエコノミカルである。しかしこの場合のエコノミストは、世俗のいはゆる『しまり家』とは意味がちがふ。反対に彼は享樂家であり、人生の快樂すべきこと、遊戲すべきこと、美を楽しむべきことをよく知つてゐる。(略)天性の生れついた本能から、無意識の動物叡智でやつてゐるのである。」

朔太郎は右の事実を様々に例証している。例えば、犀星が本郷に間借りをしていたどん底時代、一銭の余裕を見つけると、それで一本の西洋蠟燭を買つてくる。そしてそれをきれいに掃除した部屋の机の上に立てる。するとその白い蠟燭が簡素な部屋と調和して、如何にも高貴なものに見えてくる。あるいは、駄菓子屋で子供の吹く鳩笛を買つてきて、犀星がそれを吹くと、妙にリリカルな調子で、ある芸術的なムードがそこ

に生れた。窮乏のどん底にあつた犀星を訪れた、豊かな友人たちは、皆「あの笛がほしいなあ!」と思つたのである。そこで犀星は、「どうだ。おれは金一銭で人生を楽しむ術を知つて居る」と言つたのである。

如上の犀星を朔太郎は、「つまり彼は、天性的に、風流といふことの極意(エコノミカル・ヒロソヒイ)を知つてゐたのだ。」と断定する。確かに犀星は、「一分のムダもなく」「一銭で人生を楽しむ」人であつた。そこに、極まり知らぬ貪婪な享樂家が生れたのである。人生の万般が彼にとつて享樂の対象となる。こういう犀星の貪婪さが、後に犀星をして、自然主義的とも見える風貌の小説「復讐の文学」の作者としたのであつた。殊に昭和九年の作「あにいうも」と「チンドン世界」「神々のへど」等において犀星の示した態度は、無限に複雑な人生の葛藤を片端から食いつくしてゆこうとする逞しい食欲に他ならなかつた。

「室生犀星は、単に経済と時間の上で、人生をエコノミカルに生活して居るばかりでなく、芸術上の仕事の上でも、自己の天與された全財産の才能を、最も能率的にあます所なく、百パーセント以上にさへも利用して居る。」

これが「所得人・室生犀星」における朔太郎の結論であつた。

「所得人・室生犀星」と「悔恨人・萩原朔太郎」との資質の異同を、作品に即して見ることとする。そのためには、犀星の『抒情小曲集』(大正七年刊)と朔太郎の『純情小曲集』(大正十四年刊)との、特にそれぞれの冒頭に置かれてゐる「小景異情」と「愛憐詩篇」との読みくらべが適切であらう。

小景異情 その二

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの

よしや

うらぶれて異土の乞食^{たか}になるとても

歸るところにあるまじや

ひとり都のゆふぐれに

ふるさとおもひ涙ぐむ

そのころもて

遠きみやこにかへらばや

遠きみやこにかへらばや

旅上

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

せめては新しき背廣をきて

きままなる旅にいでてみん。

汽車が山道をゆくととき

みづいろの窓によりかかりて

われひとりうれしきことをおもはむ

五月の朝のしのめ

うら若草のもえいづる心まかせに。

この二作の対比において、ロマン的主観の燃焼、——青春の感傷と情熱とは、ほぼ同型の発現を示し、ほぼ同型の修辭を示していると言つていいであらう。そこに二人の資質に極めて近いもののあることが感得される。しかし、朔太郎の場合は、実生活の苦渋からまぬがれて抒情されており、そこに一種のダンディズムが感じられるのに対し、犀星の場合は逆に、実生活の影が濃く投影しており、したがってその抒情には一種意志的なものが流れている。後者の印象は、メルヘンめいた西洋風の夢幻であり、前者のそれは、俳諧めいた東洋風の風雅である。この対比は、二人の生い立ちの相違にも素直につながっていると考えていいであらう。

朔太郎は豊かな開業医の長男であった。それに対して犀星は一士族とその婢との子として生れ、生後一週間にして他人にもらわれ、七歳にして室生家の養子となったのであった。

映画『モーツァルト』から

山住正己

先日、銀座のヤマハホールで、K・キルシュナー監督の映画『モーツァルト 青春への旅路』を見た。この映画があることは、海老沢敏『モーツァルトを聴く』(岩波新書)によって承知していた。原題は“Mozart Aufzeichnungen einer Jugend”であり、海老沢氏は「モーツァルト 若き日の記録」と訳して紹介していた。「若き日の記録」では日本人はあまり見に来ないと考えて、「青春」とか「旅路」という俗受けしそうな文字を入れたのだろうか、「青春への旅路」というのは何ともおかしい日本語である。

標題はどうであれ、モーツァルト本人や父母らの手紙によって青年期までのモーツァルトを描いた映画であれば、見逃すわけにいかない。モーツァルトの手紙については、ロマン・ローランが「あなたが一度この手紙をお読みになったら、モーツァルトはあなたの生涯かわらぬ伴侶となり、困窮のときには、いつも、あのやさしい姿があなたの目の前に現われます」といつているがそのとおりだと思う(『モーツァルトの手紙』は岩波文庫などに邦訳あり)。

十数年前、栗津潔・佐藤信・林光の諸氏と私の四人の共編で、レコードや絵本から成る『おんがく・グー・ツァルト』とした。このレコードではN響室内楽団がモーツァルトの曲を演奏しており、これはとくに珍しいことではないが、手紙を朗読したのはシンガーソングライター岡林信康氏であり、これはなかなかの企画であり、また成功であった。

こんどの映画は三時間四十分、昼間、大学で講義やゼミを行なった後だったせいもあり、眠気を抑えることができず、イタリア旅行のあたりでは居眠りをしてしまった。これは何としても長すぎる。それに、登場する音楽では「トルコ行進曲」はわずか五〇秒ほどであり、多くはアダージョやアンダンテであり、これが延々とつづけば、疲れている者がいい気分で眠り込んでしまうのはやむをえない。

しかし終りに近い母の死や、父との葛藤がしだいに激しくなっていく場面などでは眠っているわけにいかなくなる。とくに後者は迫力がある。父親の顔には年とともに皺がふえ、表情には苦悩の色が濃くなる。表情の変化はみごとに出来栄である。

モーツァルトを語るとき、この父親レオポルドを抜かすことはできない。そして、ここから直ちに出てくるのは、父親による早い時期からの徹底した個人教育・天才教育のことである。父は莫大な借金をしてまで少年を旅に連れ出し、あるいは送り出すことによって教育をしてきた。

映画では、馬車にゆられて旅をする場面が何度も出てくる。少年にとって旅は楽しみでもあったろうが、つらくもあったろう。あれほど年中、馬車にゆられていたのでは、身体の健全な成長は妨げられ、頭の中は空っぽになってしまふのではないかと心配になるほどだが、行く先々でバッハをはじめ多くのすぐれた音楽家に出会って(父がその設定をしていた)、音楽家としての才能をみがき、あるいは逆にろくでもない貴族どもに出会っては、人間理解を深めていった。

これらは旅に出なければ、とうてい受けられない実物教育であった。旅先では音楽に専念するだけでなく、たくさんの手紙を書いた。手紙の執筆もまた自己教育になっていたにちがいない。今日では、たいてい電話ですませてしまい、これほど手紙を書く機会はない。手紙を書くように仕向けたのも、おそらく父親であったろう。

父による教育は息子ヴォルフガングの個性・才能に適したものであり、他の誰にも通用しないものであったろう。それは成功したのだが、こんどの映画がとりあげていた二十二歳のころには、父の予想・期待から大きくずれ始め、これが先にふれた父と子の葛藤の原因となる。つまり教育は成功しすぎて、息子は父がとて推測できなかったほどの、とてつもない力を発揮しはじめたのである。父の教育なしにはモーツァルトは大きく育たなかったろうが、父の期待どおりであれば、『フィガロの結婚』などのオペラは生まれなかったろう。映画は、モーツァルトが「僕のいまの最大の関心事はオペラの作曲です」というところで終わっている。

映画を見て、到達目標のきまつた教育はつまらないと思ひ知らされ、またモーツァルトの手紙を読み直そうと思つたところである。

南樓望（南樓の望め）

盧僊（松枝茂夫訳）

盧僊（？―？）。字不詳。相州臨漳（今の河南省臨漳県）の人。地方の下級官吏から集賢院学士に拔擢され、吏部員外郎となった。その間は、巴の地（四川省）に左遷されたことがあるらしい。詩題の南樓とは、巴のどこかの町の城壁にある南門の望樓であろう。そこに登って異郷の春の景色を見つつ望郷の思いを歌う。

去國三巴遠

國を去つて三巴遠く、

登樓萬里春

樓に登れば 萬里春なり。

傷心江上客

傷心 江上の客、

不是故鄉人

是れ故郷の人ならず。

都を去つてはるばるとここ三巴に来て、南樓に登ってみれば見わたすかぎりの春景色。わたしの心は傷む、江上を行きかう旅人たちは、一人として同郷のものではないのだ。

粉雪のふる日

浅野 晃

けふは粉雪

いちにち茶の間で

子供はライオンの絵本など見てゐるし

妻はストーブに薪をつぐ

私は聖賢の書をひもとく

粉雪はいよいよふりしきり

窓はしだいに暗くなる

やがて重たくなるであらう

ふかい知恵の言葉の

あまりに軽く私のなかに

ふることよ

積み積るであらう粉雪の

あまりに速く私の上に

消える言葉よ

窓はいよいよ暗くなり

もはや夜に入る雪のけはひ

ライオンの絵本などをひらくは子供

ストーブに薪をつぐは妻

聖賢の書をひもとくのは私なのに

ふかい知恵の言葉よ

重たく重たくふって

私のなかに積もらぬか

(全詩集から)

初山踏み

牛尾 三千夫

正月の山にきこゆる斧の音。初山踏みの 人達にして

山入木を門先に立てて、頂きは 稻穂の如く垂れ下げてあり

門松の雌雄の枝ぶりの 揃えと、人の夫婦の似合へるは、仲々なしと昔より言ふ

栗の餅、黍の餅を搗かずなりて、その香ばしき味を 恋ふとな

甘露煮の 鮎を炊かむと、きのふ今日。弱火にかけて 気長に煮居り

たま／＼に 雉子の聲を 聞きし時。山彦となりて、再び鳴けり

風吹き 初しぐれ過ぎし 夕空に、虹はかかれり。出でて見よ。子ら

美しきものに心はよりそへど、消えゆく虹の せんすべもなし

ファンタジー

小高根 太郎

ガラスの牢獄に閉じこめられたモナ・リザが、夜な夜な私の脳細胞に投影する。すると私は眠くなり、いつの間にかノアの箱舟に乗って冒険の旅に出かける——まだ汗されていない処女星を求めて。この巨大な宇宙船にはもろもろの民族の選ばれた人々、あらゆる動植物が詰めこまれている。象やキリンや鯨もいる。コブラもいるし、さそりもいる。アメーバもいるし細菌もいる。みんな大人しく辛棒強く、何百万年後か何千万年後か、いつとも知れぬ到着の日を待っている——明るい未来の希望に胸をわななかせて。

ふりかえると数十億年もの間、生物たち、とりわけ人間という名の化物が、散々に住み荒らした地球が見る見る小さくなって行く。

老いさらばえた太陽と、その忠実な子分の衛星たちも。みんな次第に遠ざかる。さらば、さらば、古ぼけた地球よ、さよなら、さよなら老朽ちた太陽系よ。長いことお世話になったが、今こそ私たちは去る、生命の限らない発展を求めて。

ふと、目ざめると、まっくらがり。枕もとの時計の青白い燐光は午前四時十二分（老人の睡眠は短い）。今ごろは冬の夜の、きびしい寒さと闇の中、誰一人ながめるものもないのに、モナ・リザはやはり妖しく微笑しているのだろうか。

善と悪

石山直一

神の義の前には人間の誇り得る善行はなく、
神の愛の前にはその赦しを否み得る人間の悪業はないと言われる

たしかに

善人にも悪人にも等しく日が照り

善人にも悪人にも等しく雨が降る

しかし

すべての悪業が赦されるとすれば

私達は何をしてもいいと言うことになるのだろうか

善悪の区別は私達の幻影に過ぎず

究極の真理は

善悪無記のあつけらかんとしたものになるのだろうか

それとも、やはり

善はどこまでも、しなければならず

悪はどこまでも、してはならぬことなのだろうか

ある慧眼のひとが言った

「どのような悪業も赦されているという事実には、
ほんとに眼が開きさえすれば

人間はすべての悪業ができなくなり

喜んで善行をせずにはおれなくなるだろう」

善悪の問題を解く鍵はこの矛盾した事柄の中にあると私も思う

そして、人間の真の救いも、この開眼の上に実現するのだろう

わたしの星

田中克己

わたしはたしかに悪い星の下に生まれた

前の年の五月にはハレー彗星が来て

人々はその悪気をおそれ

自殺したり狂気するものもあった

わたしの母方の祖父はこの星の下で死に

あとは腹ちがいの叔父が継ぎ

わたしの母はその新家ということとなり

結婚して遺産をもらった

結婚の相手は大阪の商家の長男で

この結婚は法的には認められず

翌年わたしが生まれると母はわたしに家を嗣がして父の家に入り

四年後には死んで父の家の墓に入った

わたしはそんなわけで兵庫県三原郡賀集村の出身である

わたしの生まれたのは彗星の翌年で

辛亥の年であるがこの十月十日に

革命が起り清朝は倒れた

わたしは清朝の倒した明朝の遺臣鄭成功――

國姓爺こくせいやと呼ばれる――の研究をして

無事大学を卒業し翌年結婚した

國姓爺の母は日本人であつて

明朝の求援を日本に求めたがきかれず

台湾をオランダ人からとつてここに據つた

清朝は困つて沿岸三十華里の人民の居住を禁じた

わたしはこのことをくわしく書いて先師からほめられ

今でもそれだけがわたしのほりである

みなわたしの家へ来ると変な顔をする

わたしは詩人のくせにむつかしい史籍を数百冊ならべているからである

詩人はわたしを史学者だといひ――史学者はわたしを詩人だといひ

どちらも仲間に入れてくれないのである

わたしはそれを半ば困惑し半ばひややかに見ている

そんなわけでわたしは詩人としてもきらわれものである

悪い星の下に生まれたのである。

死を思う

坂口 允男

今の私にとって死は近くて遠く、遠くて近い
しかし若い時あれ程強かった

死に対する恐怖がなつかしい。

あれはつまり若さのしるしだったのだ。

あの時死の恐怖から逃れようと

私はひたすら永生を願った

しかし或夜自分は永久に生きるのだと思った時
永生という事がどんなに退屈に思われた事か。

しかも人間はそれ以上を望む事はできない。

この身の凍るような体験が

私を死の恐怖から救った

死は所詮生から逃れる事はできない
想像された死後の世界は

現実の世界の反映に外ならない

孔子が「我未だ生を知らずいづくんぞ

死を知らんや」と言った時

彼はごまかしたのではなく

死の問題から逃げたのでもなかった。

彼は死の問題は生の問題に他ならないと

言っただけだった。

されば大悟した人はすべて凡俗の生に

もどっていった。パスカルもまた現実には

慰戯の世界にもどって行く外はなかったのだ。

しかしもし死がなかったら

人生には別れもなく終りもなく

神秘もなければ詩もないだろう。

私は死を讃美せずにはおられない

死ぬ事の讃美ではなく

死というものがある事の有難さを

心からたたえたい。

旅 愁

大野沢 緑 郎

ネヴァ河のむこうにペテルブルグのシルエッ
トがうきだされている 尖塔のあかね雲に白
夜の季節をすぎた刻がバルト海にながれくだ
っている オブホフスキー橋の欄干に凭れつ
いさきほどめぐっていたピョートルの夏の庭
を その深い樹立のおくを ピスカリヨフ墓
地の菩提樹の並木 オリガ・ベルゴリツツの
詩を おもくかみしめている

ゆうぐれ とおい北の街の美しいゆうぐれ
わたしはいまここではなになのか いまわた
しをつつんでいるものはなにか そうして明
日はどこへ このあまりにひろい空の果てに
つきることないあの森と湖と流れのつづきの
うえに とめどもない想いがひろがっていっ
ている。

望遠鏡を

たかはし しげおみ

土曜日だというのに

小学生の孫たちは

おそおそに帰ってきた

星の勉強会があつたそうだ

ハレー彗星のことが 毎日のように

新聞に出ている 頭だか しつぽだか

そろそろ見えはじめたのか

望遠鏡があれば見えるのか

わたしはオペラグラスを片手に

屋上にかけてのぼったが

今宵は曇天 ダメだ ダメだ

ハレーを見せてやらねばなるまい

見なければ 一生の悔いだ

さあて 望遠鏡を探しださなきゃ

ブリタニカ

福地邦樹

先日衝動的に百科辞典ブリタニカを買ってしまった

家内はしぶい顔をしたが

私は嬉々として新しい棚を吊り

満足げに二十六万円の買物物を眺めた

すると牝猫のゴエモンもブリタニカが大層気にいって

その上にだらりと寝そべり昼寝の場所にしてしまった

購入後一ヶ月

私はまだ三回ほどひいただけなのに

ゴエモンは毎日夏の日永をそこで昼寝する

ブリタニカの上で毛づくろいをしてはむだ毛をかきおとし

こげ茶の上等な表紙に時々爪まで立てていてではないか

叱ると媚びるように身をくねらせ

バルザックの描く砂漠の牝豹のように

悩ましいあくびをするのだ

ああ 猫と暮らすことは何たる墮落

文化など無用なものの何たるしあわせ

遠くの火

花井タツ子

遠くで火が燃えている
奥で大人たちの賑やかな声
汽車で母が見舞いに来たので
寝ている背中で地が揺れる
報せようとしても聞こえない
天から馬車が迎えに来る
天女たちは薄布を後にひるがえして
竹藪で鳥が騒ぐ
お寺のおばあちゃんが死んだ

火はその人を焼いている火
馬車はもつと下におりて来る
地の揺れがはげしくなる
やっと気づいた大人たちは
こちらの部屋に走って来ると
布団にくるんでかかえ庭に飛び出した
私はもうすっかりおびえてしまっていた
後からあの時私の命も危なかったと聞いた。

(同人規定)

1. 同人は田中が『四季』にふさわしい作家を選び、毎号のせることとする。
1. 老大家以外は同人費として毎刊 2,500円 (送料共) を納めること。
1. なるべく常用漢字、常用かなづかいを用いること。(短歌・俳句・川柳・引用文等は別にする)
1. 当雑誌を各方面に広く配布してもらい、売金を振替東京 8-132924 四季社に送金 (郵便小為替) で送ってもらいたい。(送料引)
1. 同人に適当な人があれば紹介してほしい。

(会員規定)

- 会員は男女職業年令を問わない。
第二次『四季』を閲覧し、堀辰雄氏を愛した経験のあるものに限る。
- 投稿はなるべく常用漢字、常用かなづかいを用い、創作であること
(2 ページ分が望ましい)。締切 2 月末日
- 会員費として 4 ケ月分 2,000円 (送料毎号 170円) を
振替東京 8-132924 四季社まで納入してほしい。
- 同好者を誘ってもらいたい。

同人略歴 (5)

高 田 瑞 穂

明治43年 5 月13日

静岡県浜名郡白須賀町にて誕生。

大正12年 4 月 静岡県立浜松 (第一) 中学校入学。

昭和 3 年 4 月 静岡高等学校文科丙類入学。

昭和 6 年 4 月 東京帝国大学文学部国文学科入学。

昭和 9 年 3 月 同卒業。

昭和 9 年 4 月 東京帝国大学文学部国文学科大学院入学。

昭和13年 3 月 同退学。

昭和13年 4 月 東京帝国大学文学部哲学科大学院入学。

昭和15年 3 月 同退学。

昭和 9 年 7 月～14年 7 月

京華商業学校教諭。

昭和14年 7 月～16年 4 月

東京都立園芸学校教諭。

昭和16年 5 月～21年 3 月

東京都立第一中学校教諭。

昭和21年 4 月～22年 3 月

成城高等学校教諭。

昭和22年 4 月～28年 3 月

成城学園高等学校教諭。(新学制施行)

昭和29年 4 月～56年 3 月

成城大学文芸学部教授。詩集 1 冊、著書多数。

昭和60年11月11日 夫人静子様逝去、哀悼。

小高根 太郎 〒156 世田谷区桜 1-59-2 に転居

四季関係出版書目 (近刊)

堀 多恵子 『來し方の記・辰雄の思い出』 東京 花曜社 (五月)

浅野 晃 『浅野晃全詩集』 埼玉・和光市わこう出版社 (五月)

大野沢緑郎 詩集『遙かな日の黄昏に』 東京・花神社 (六月)

植村 清二 『諸葛孔明』 中公文庫 (十一月)

松枝 茂夫 『紅樓夢』 (七月完訳) 岩波文庫 (十二冊)

薫・冬二・道造・克己・伸二郎

『日本の詩歌』 24 中公文庫 (四版)

野田 又夫 『ロック』 (人類の知的遺産 36) 講談社 (十一月)

『四季』 第一次・第二次 (三版) 東京日本近代文学館 (十二月)

次号原稿締切 2月末日

季刊四季 第九号 定価300円 (送料170円)

発行 四季社

〒166 東京都杉並区阿佐谷南1-40-8 田中克己方

電話 03-314-2783

印刷 橋本保印刷

〒536 大阪市城東区天王田7-24 電話 06-961-4330